



遊女の最高位である
花魁の代表的な髪型
巨大な扇形の髷が特徴

伊達兵庫

だてひょうご

巨大な組帯を締め、高下駄を履いて八文字に歩く「花魁道中」は誰しも目にする。
衣装は大変重く、二十〜四十kgにもなるといわれている。



サイズ約 24cm 制作／高森春恵



歌舞伎や時代劇で、最もお馴染みの花魁の髪型。遊女の最高位である花魁（太夫、傾城などともいう）伊達兵庫に何本もの櫛簪を挿し、体の前で結んだ組帯（まないたおび）の典型的花魁スタイル。帯の豪華さを見せるために次第に幅が広がり、巨大になり、立体的で派手な装飾が施されるようになった。上方と江戸では簪の数や形が少しずつ違い、また時代によっても違っていた。「上方はこつてり、江戸はすっきり」というのが定説。この花魁は江戸風の、ピンクの着



物に、牡丹と蝶の組帯で初々しい雰囲気の花魁。幕府公認の遊郭・江戸吉原の遊女たちの頂点に立つ花魁は、美貌だけでなく、教養を備え芸事にも秀でていることが必須であった。花魁になるには、まず禿（かむろ）になる事が条件。七〜十五歳くらいで吉原に引かれてきた少女たちは、禿となり、やがて成長すると新造（遊女見習い）となり、将来有望な新造のみが、花魁道中と一緒に参加出来る資格を持つ「振袖新造」になった。運が良ければ後に花魁となることが出来た。

遊女として客を取ってから約十年後に年季奉公が明けたといわれる。彼女たちの最大の夢は身請けで、吉原から出られる合法な方法はそれしかなかった。ただし吉原遊女たちの平均寿命は二十代（殆どが病氣によって死亡）といわれるので、年季まで生きていられるかどうか分からない、過酷で悲しい運命だった。

